

第三詔 景行天皇 熊襲の國を平け給ふの詔(十二年十二月五日)

朕聞く、襲國に厚鹿文、連鹿文といふ者有り。是の兩人は熊襲の渠帥者なり。衆類甚だ多し。是を熊襲の八十梟帥と謂ふ。其の鋒當る可からず。少く師を興さば則ち賊を滅すに堪へず、多く兵を動かば是れ百姓の害なり。何でか鋒刃の威を假らずして、坐ながらに其の國を平けむ。(「日本書紀」七)

第五詔 日本武尊に東夷を伐たしめ給ふの詔(四十年七月十六日)

朕聞く、其の東夷、讖性暴強、凌犯を宗と爲す。村に長、無く、邑に首勿し。各封堺を貪りて並に相盜略む。亦山に邪神有り、郊に姦鬼有り。衢に遮り徑に塞りて、多く人を苦ましむ。其の東夷の中に、蝦夷是れ尤も強し。男女交り居て、父子別無し。冬は則ち穴に宿、夏は則ち櫟に住む。毛を衣、血を飲みて、昆弟相疑ひ、山に

登ること飛禽の如く、草を行ること走獸の如し。恩を承けては則ち忘れ、怨を見ては必ず報ゆ。是を以て箭を頭髻に藏め、刀を衣の中に佩けり。或は黨類を聚めて邊界を犯し、或は農時を伺ひて以て人民を略む。撃てば則ち草に隠れ、追へば則ち山に入る。故れ往古以來未だ王化に染はず。今朕汝の人と爲りを察るに、身體長大、容姿端正。力能く鼎を扛ぐ、猛きこと雷電の如く、向ふ所前無く、攻むる所必ず勝つ。即ち知る、形は則ち我が子にて、實は即ち神人なり。是れ寔に天、朕が不穀、且國の不平たるを愍みたまひて、天業を経綸め宗廟を絶たざらしめたまふか。亦是の天下は則ち汝の天下なり。是の位は則ち汝の位なり。願はくは、深く謀り遠く慮りて、姦を探り變を伺ひて、示すに威を以てし、懷くるに德を以てし、兵甲を煩はさずして自らに臣隸はしめよ。即ち言を巧にして暴神を調へ、武を振ひて以て姦鬼を攘へ。(「日本書紀」七)